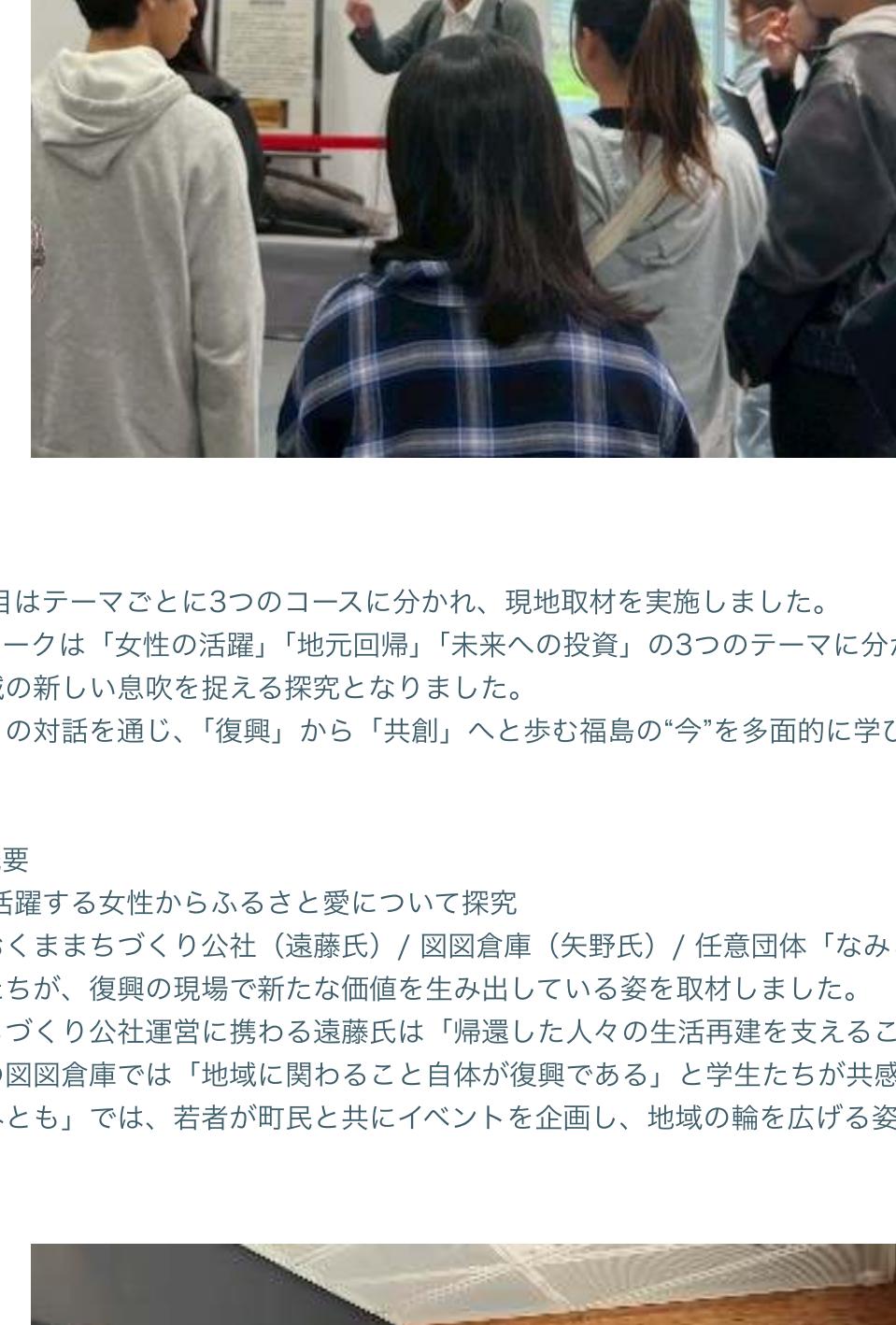


協議会の活動

活動紹介

令和7年度「新しい東北」官民連携推進協議会では、福島県において「福島『ふるさと愛』プロジェクト2025～未来への架け橋～」を開催しました。

全国から集まった大学生が、地元の方々との交流や取材を通じて、震災復興の歩みとともに「ふるさと愛」の意味を探る三日間のフィールドワークを行いました。
2025年10月11日（土）から13日（月・祝）にかけて行われた本プログラムには、全国の大学生17名が参加しました。
初日は東日本大震災・原発力災害伝承館、震災遺構浪江町立請戸小学校、東京電力炉内資料館を訪問し、複合災害の実態と教訓を学習しました。



2日目・3日目はテーマごとに3つのコースに分かれ、現地取材を実施しました。
フィールドワークは「女性の活躍」「地元回帰」「未来への投資」の3つのテーマに分かれて行われ、それぞれが地域の新しい動向を捉える探究となりました。
現地の人々との対話を通じ、「復興」から「共創」へと歩む福島の「今」を多面的に学び取ることができました。

3コースの概要

①福島県で活躍する女性からふるさと愛について探究
訪問先：おおくまちづくり公社（遠藤氏）/ 図書館（矢野氏）/ 任意団体「なみとも」（小林氏）
地域の女性たちが、復興の現場で新たな価値を生み出している姿を取材しました。
大熊町のまちづくり公社運営に携わる遠藤氏は「帰還した人々の生活再建を支えることが使命」と語り、飯館村の図書館では「地域に関わること自体が復興である」と学生たちが共感を寄せました。
浪江町「なみとも」では、若者が町民と共にイベントを企画し、地域の輪を広げる姿が印象に残りました。



②福島県で自分らしく生きる地元回帰について探究
訪問先：浅野物産株式会社 フタバスーパー・ゼロミル（岡田氏）/ カフェ＆ギャラリー秋風舎（志賀氏）/ おかしなお菓子屋さんLiebe（横須賀氏）
「自分のらしく地域と生きる」をテーマに、移住・起業・文化発信の現場を取材しました。
双葉町の岡田氏は、糸の製造を通じて「世界に誇れる地元産業」を目指しており、志賀氏は古民家を改装したカフェ「村に人が戻るきっかけをつくりたい」と語りました。
横須賀氏の「家族や町の人々に支えられながら、自分らしい働き方を実現する」という言葉に、学生は深い印象を受けました。



成果として、震災と原発災害の教訓を踏まえた、地域の新たな可能性を多角的に学ぶことができました。
地元の方々が語る「ふるさと愛」を学生が映像・言葉で記録し、デジタルアーカイブ化を進めるこ
とができます。
3コースで制作された映像は、12月の「東北3県・石川県合同セミナー」にて上映予定です。

まとめ：1年が経過し、福島の街で出会ったのは、「被災地」ではなく、「未来を拓くまち」でした。学生た
ちが語る「ふるさと愛」を学ぶことは、過去を残さないことで、架け橋となりました。

一覧に戻る

協議会の活動

● 活動紹介

● 特集記事サイト

新しい東北とは

協議会の概要

設立趣意書

設立会員

運営会員

ロゴ・リンクバナー

facebookページ

支援情報

会員募集・会員情報の変更

分野別ポータル

これまでの取組・活動

連携支援制度・セミナー制度

「新しい東北」情報発信会

「新しい東